

合同研究会「組織コミュニケーション論」開催報告

HIS 研究会主査 川野喜一

IS 技術者のための Psytech 研究会主査 三村和子

基礎情報学研究会主査 高田信夫

■開催日時 2018年9月22日(土) 14:00~16:30

■開催場所 青山学院大学 青山キャンパス 総研ビル 10 会議室

■出席者 19名

■講演概要

- 講演者：辻本 篤先生（北海道大学大学院 メディア・コミュニケーション研究院 准教授）
- 講演タイトル：「イキイキと働ける職場環境にするには？」
- 講演内容

三つの研究会から、それぞれの研究会の主旨、研究課題や参加者の関心事について説明があった後、基礎情報学・「HACS」モデルで考えた「イキイキと働ける職場環境」への取り組み、研究についてお話しいただいた。

- ・基礎情報学との出会い、組織論における HACS モデルとその醍醐味
- ・ FrancFranc の商品開発の事例研究：HACS 的合意を実践し、従業員が「働き甲斐」「イキイキと働いている感」を抱いている（感情表現と感情共有）。
- ・ HACS 的合意の実践：一次観察者、二次観察者の役割、主観的イメージの形成と客観的妥当性・組織的役割の付与。

言語化できない思い、価値観を、一人ひとりが一次観察者としてもっているが、マネージャが二次観察者として、それらを言語化して組織化することにより、客観化し、組織的価値にすることができる。それが再び、個人においてくる。例えば営業で担当者が、困っているお客様に適切な商品をお届けすることにより、ともに喜びを分かち合う。喜びが生まれたプロセスをマネージャが言語化して客観化し、それを組織的な価値として示す。それが再び個人においてきて、働きがいになる。

- HACS モデルの意味、作り手の自律性や主体性、IT エンジニアや SE の職場との係わりなどについて質疑が行われた。とくに他律的な職場で働く IS 技術者にとっても、人の心(自律システム)の係わりが重要であること、“人間中心の観点に立つ”ことの重要性、日本人はハードウェア(もの)には息吹を感じ、ものづくりで成功したが、ソフトウェア(情報)を身体感覚でとらえることができず、人間を機械として見る傾向がでてきたことなど、あらためて考える好機となったと思う。

以上 (芳賀正憲 / 川野 記)